

21.8.12

# 鹿大の チカラ

KAGOSHIMA  
UNIVERSITY

多島圏研究センター

## 長嶋俊介 教授(60)



足を運んだ島は3千。国内の450を超える有人島はほとんど訪ねた。「島に行つて島の人々の視点に立ち、島のためになるものをやりたい」。1年の4分の1を島で過ごし、研究を続ける。

防災から文化、過疎、環境、情報……。島に関するあらゆることが研究テーマだ。例えば、産業廃棄物の不法投棄に悩む香川県・豊島の問題。法廷闘争などに島の人たちが費やした多大な負担を、客観的なデータにした。「一体彼らはどう

### 島嶼学

出身は新潟県・佐渡島。島を専攻テーマにしようと決意した原點がある。本土で学んでいたとき、島が厳しい環境に置かれているのを感じた。船に頼る生活、都会との経済格差……。「研究をして、島の人たちに還元していきたい」と思ったからだ。

## 佐渡出身原点に研究



もう一つは「行政過疎」。平成の大合併で、島から行政の中核機能が奪われてしまつたと指摘する。島嶼外の市町村への編入で島の役場規模が3分の1程度になり、「眞に島のことを考えてかじ取りに専念できる人が少なくなつてきてる」と危ぶむ。

島と都会は何を学び合えば良いのか。キーワードとして「互助」と「共助」を挙げる。阪神淡路大震災ではボランティアが活躍した。だが、震災被災者からは、友人や親類など身

タル通信網（ISDN）レベルのインターネット利用ができる地域が当時半数を占めた。情報の遅れは産業拡大の支障になつた。ITエンジニアも増えた。人「減は相変わらずだが、一定の社会が維持できる適度な人口である『過疎』な状態、といふ考え方もある」と話す。

最近の問題の一つは「情報過疎」だ。05年に島嶼部の通信環境を調査してみると、総合ナビゲーションシステム（GPS）が導入され、島の役場規模が3分の1程度になり、「眞に島のことを考えてかじ取りに専念できる人が少なくなつてきてる」と危ぶむ。

逆に島に欠けていたものが「共助」の意識。ボランティア活動など見ず知らずの他人の助け合いのこと。島には乏しかつた考え方だ。この精神を学ぶことで、例えば島外者とのかわり合いをよりよい地域社会づくりに結びつけることができる。

「島というのは地域が小さい分、いろんな相互作用がよく見える。島を研究することだけで、日本や世界の生活環境を研究することにもつながるんです」